2018.12.22

伊藤正男先生の逝去

小嶋祥三

新聞の訃報欄で、伊藤正男先生が 12 月 18 日に亡くなったことを知った。90 歳だったとのこと。JT 生命誌研究館の「未知に挑戦する私の脳」という、先生の自ら歩んだ道を振り返る臨場感の溢れた文章を読んで、とてもおもしろかった。と同時に、神経科学の凄まじい発展を思った。先生は学術会議の議長等を歴任され、神経科学の発展に尽力された。他の領域の研究者がうらやむほどだったと聞いたことがある。「脳の世紀」、「脳科学の時代」と言われてきたが、先生は日本の神経科学の現状をどうのように見つめていたのだろうか。

ここで「先生」と書いたが、わたしは弟子ではないし、講義を受けたこともない。霊長類研究所の助手だったころ、犬山に来られた先生が仕事の話をされた。小脳のように神経回路網が分かっている領域と、研究所でやっていた、回路網が分かっていない前頭前野では、同じニューロン活動をみても明らかにしようとすることが大きく異なる。そんな点を先生に質問したように記憶している。先生との接触はそれだけである。

ただ、この点は研究者が進む方向を決めるうえで重要だったように思う。研究所の神経生理部門で、久保田競先生の下で助教授だった二木宏明先生は心理学出身だったが、回路網を重視しているように見受けられた（二木先生は脳画像研究に興味を示されなかったように思う）。また、岡山大学に移った助手の酒井正樹さんも同じ方向を向いていた（酒井さんは神経回路が単純な昆虫の神経系を研究した）。

わたしは前頭前野のニューロン活動の研究は、神経心理学に神経生理学的手法を持ち込んだように思っていた。神経回路網など分からないし、刺激や運動との対応関係がつけばいいと思っていた。それゆえ、脳画像研究が出てきたときにはとても魅力的に思えた。脳全体の活動状態が一挙に分かるのは素晴らしいことだった。fMRI では脳の血流変化を計測し、ニューロン活動も、ニューロンの回路網も直接的には問題にしていない。正統的な神経生理学者には受け入れにくいものだったかもしれない。しかし、脳画像研究は分析法を発展させ、構造的、機能的結合やその性質や方向、脳内ネットワークの同定、MVPA による活性の内容を明らかにするなどしてきた。動物の基礎的研究は脳画像研究の成果を参考にしてもいいように思う。

伊藤正男先生は小脳の研究で有名だが、自分の実験データを認めない研究者が世界にいたので、かれらと戦うことで小脳との付き合いが長引いたと書かれていた。自分は飽きっぽいとも書かれていた。先生は小脳の研究で考えたことを大脳へも適用することを考えておられたと思う。それについて、このホームページの『予測する脳』の冒頭で簡単に触れておいた。合掌。